

「個別の指導計画の作成、記録及び評価」  
の教授方法・内容の研究  
-障害のある子どもの保育における保育士等研修を通して-

Study of teaching methods and contents of "Preparation, Recording and Evaluation of Individual Care and Education Plan"- Through Childcare Workers training in Childcare for Children with Disabilities-

河崎 美香                      明柴 聰史<sup>1</sup>

KAWASAKI Mika              AKESHIBA Satoshi

本研究の目的は、保育士及び保育教諭等（以下、保育士等）が先行研究で明らかにされた障害のある子どもの個別の指導計画を作成する際に抱く困難課題を軽減するため、保育士等研修における教授方法・内容を検討し、保育士等へのアンケート調査から教授方法・内容を研究することであった。筆者らは個別の指導計画の作成における研修において、演習内容と整合する視聴覚教材を制作し、作成の計画、実践、評価、改善の過程の段階ごとに、教授する方法・内容を試みた。また、個別の指導計画の作成を「オーダーメイド<sup>註1)</sup>の洋服の仕立て」で例示し、作成の各段階を子どもの生活のしやすさと関連付けて考えることができるように考慮した。調査結果から、保育士等は研修の中で教授内容を補うための視聴覚教材の必要性を感じており、視聴覚教材を組み合わせたことで内容の理解が進んだことが分かった。今後は保育現場でどのように生かしていくのかを検証する必要がある。

キーワード: 障害のある子ども, 個別の指導計画, 保育士等研修, 視聴覚教材

## I はじめに

2006(平成18)年「障害者の権利に関する条約」が国連総会で採択され、2007(平成19)年に我が国では、従来の「特殊教育」から体制を変え、本格的に「特別支援教育」を開始した。2009(平成21)年の「幼稚園教育要領, 小学校学習指導要領, 中学校学習指導要領における障害のある幼児児童生徒の指導に関する規定」<sup>2)</sup>において、個々の幼児児童生徒の障害の状態などに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的に、組織的に行なうこととしている。

現在では、特別支援学校、幼稚園、小学校、中学校、高等学校のすべての、障害のある幼児・児童・生徒に対して、個々の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成し活用することが求め

---

<sup>1</sup> 富山短期大学幼児教育学科 明柴聰史

られている。

「障害者基本法」(2011)に基づく「障害者基本計画」では、「障害のある子どもの発達段階に応じて、関係機関が適切な役割分担の下に、一人一人のニーズに対応して適切な支援を行う計画(個別の支援計画)を策定して効果的な支援を行う。」<sup>3)</sup>ことが示されている。また、「発達障害者支援に関する行政評価・監視<結果に基づく勧告>」(平成29年1月20日総務省公表)により、①発達障害児の早期発見、②発達障害児に関する支援計画及び指導計画の作成の推進、③発達障害児に関する情報の共有・引継ぎの推進の3点を含む勧告がなされており、個別の指導計画の作成が重要であると位置づけられている。

また、2017(平成29)年4月に厚生労働省通知(雇児保発0401第1号平成29年4月1日)で定める「保育士等キャリアアップ研修ガイドライン」を受けて実施されている保育士等キャリアアップ研修における障害児保育の分野において、「個別の指導計画の作成、記録及び評価」は研修内容に組み込まれ、必要性が明示され、保育士等においてニーズの高いものとなっている。

文部科学省によると「特別支援教育体制整備状況調査結果」<sup>4)</sup>として、2016(平成28)年と2018(平成30)年の公表結果を比較してみると、全国の国公私立の幼保連携型認定こども園・幼稚園・小学校・中学校・義務教育学校・高等学校及び中等教育学校における個別の指導計画の作成状況(個別の指導計画を作成している人数)は、一昨年度との比較で51,916人増加し543,742人となっている。学校において、計画の作成が必要だと判断している人数のうち、実際に計画が作成されている人数の割合は、平成28年の81.9%から0.7%増加し、全体で82.6%になっており、個別の指導計画の作成率が年々高く推移してきていることが分かる。学校種別ごとの内訳をみると、小学校の作成状況は94.9%、中学校は86.2%に比べ、幼稚園の中で計画を作成している園は49.1%と作成状況はあまり変化がなく、吉川(2016)も示すとおり、「個別の指導計画の作成は、未だ幼稚園において十分に浸透しているとはいえない状況である」<sup>5)</sup>ことが分かる。

また吉川(前掲)は「個別の指導計画が浸透、機能化するためには、計画作成に伴う保育者の困難性の軽減が課題である」<sup>6)</sup>とした。幼稚園を対象にした三つの先行研究をみると、金・園山(2008)は「『各幼児に的確な発達課題及び目標や支援案を引き出す作業』について一番難しく感じている」<sup>7)</sup>とした。菊田ら(2014)は、「特に『具体的な指導内容の設定』や『評価』に困難感を抱いていることが明らかとなった」とし、そこに「焦点を当てた研修を行っていく必要がある」<sup>8)</sup>とした。原野ら(2009)は、「個別の指導計画を作成しない理由としては、『作成できる専門知識のある人がいない』」<sup>9)</sup>を挙げている。

以上のことから、個別の指導計画作成の必要性が求められる中、保育士等の知識・技術の向上が喫緊の課題だといえる。

## II 研究目的

本研究では先行研究に挙げられた保育士等が抱く困難課題「的確な発達課題及び目標や支援案を引き出す作業」「具体的な指導内容の設定」「評価」「個別の指導計画の作成に関する専門知識」を軽減できるような「個別の指導計画の作成、記録及び評価」の教授方法・内容について検討し、保育現場で個別の指導計画が浸透することを研究の目的とする。

そこで筆者らは、個別の指導計画の作成に係る教授方法・内容を検討し、A県保育士等が対象

の保育士等キャリアアップ研修「障害児保育における個別の指導計画の作成と記録、評価」において実践した。研修後に保育士等から、研修に対するアンケート調査を行い、その結果をもとに、教授方法・内容について考察する。

本研究は、「個別の指導計画の作成、記録及び評価」であり、「個別の教育支援計画」とは異なる。「個別の教育支援計画」は、文部科学省（前掲）によると「障害のある幼児児童生徒一人一人のニーズを正確に把握し、教育の視点から適切に対応していくという考え方の下に、福祉、医療、労働等の関係機関との連携を図りつつ、乳幼児期から学校卒業後までの長期的な視点に立って、一貫して的確な教育的支援を行うために、障害のある幼児児童生徒一人一人について作成した支援計画」<sup>10)</sup>であり、より長期的で、育ちの全体像を記した包括的な計画である。

一方、個別の指導計画とは、文部科学省（前掲）で示された「幼児児童生徒一人一人の障害の状態等に応じたきめ細かな指導が行えるよう、学校における教育課程や指導計画、当該幼児児童生徒の個別の教育支援計画等を踏まえて、より具体的に幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応して、指導目標や指導内容・方法等を盛り込んだ指導計画」<sup>11)</sup>とされており、本研究では、乳幼児の保育を行う保育士等の作成する指導計画を「個別の指導計画」とする。

### III 研究方法・内容

先行研究で明らかにされた個別の指導計画の作成における保育士等が抱く困難課題を軽減するための教授方法・内容の検討を行なう。

#### 1 教授方法・内容の検討

第一に、保育現場で書きやすいよう、子どもの生活や発達を項目ごとに分類した個別の指導計画の書式を作成した(図1)。作成に係る視点と手順を示したうえで、講義-視聴覚教材-演習-スーパーバイズの組み合わせを1クールとし、個別の指導計画作成を大きく4段階に分け、4クール教授することを試みた(図2)。

第二に、金・園山（前掲）の「各幼児に的確な発達課題及び目標や支援案を引き出す作業」<sup>13)</sup>や菊田ら（前掲）の示した「具体的な指導内容の設定」や「評価」といった作成段階における困難感を軽減する方法として、筆者らは視聴覚教材を研修に取り入れることにした。しかし、保育・幼児教育、特別支援教育、福祉の分野で視聴覚教材を制作している出版社のカタログやホームページを複数調査<sup>注2)</sup>したが、現在、「個別の指導計画の作成、記録及び評価」に関するものは見当たらなかった。そこで、筆者らは個別の指導計画作成の各段階（計画、実践、評価、改善の過程）が可視化され、演習内容と整合した視聴覚教材制作を試みた。

園長	主任	副主任	障害児保育 リーダー	担任
----	----	-----	---------------	----

〇〇 〇〇 個別の指導計画(例)

幼児名	年齢	クラス名/担任名
A		

その他には、関係機関からの情報などについて記入する。

複数の保育士等の目を見て、生活や発達など様々な角度から日々の保育を振り返り子どもの姿を記入する。全体をとらえるためにも、気になる点だけでなく、強みや得意なことも記入する。

障害児保育リーダーは、管理職・主任等とのつなぎ役を担うことを明示する。できる限り複数の保育士等が目を通し、共通理解することで支援に一貫性が生まれる。

長期(年間)の目標を立てる。保護者や本人のニーズをもとに、子どもの育ちをいろいろな視点から評価できるような表現で記入する。

1年間を振り返り、子ども・保護者・保育士等の視点で総合的に評価し、次年度に引き継ぐ。

子どもにとって最善の利益となるよう、家庭での様子や保護者の思いを聴き、同意を得て記入する。

図1 個別の指導計画(例)と作成に係る教授内容<sup>注3)</sup>

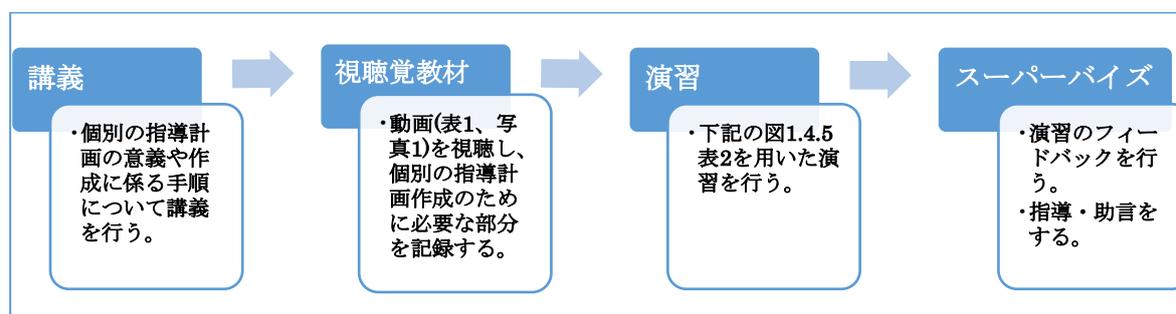


図2 研修の進め方フローチャート

視聴覚教材においては、保育所等でよく見られる事例を作り、園長、障害児保育リーダー、担任保育士、担任補助保育士、他クラス保育士、ベテラン保育士の配役で全4回の保育カンファレンスを再現した。視聴覚教材の分量については、今後保育士養成校での使用も考え、90分で講義-視聴覚教材視聴-演習-スーパーバイズができるように作成した。それぞれの保育カンファレンスの詳細は、以下の通りである(写真1、表1)。

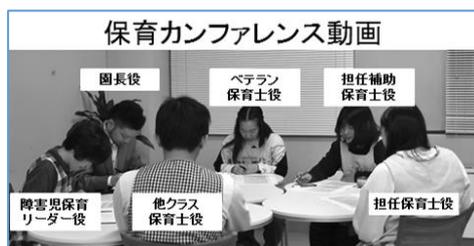


写真1 視聴覚教材(保育カンファレンスの様子)

表1 視聴覚教材のテーマ、構成と内容

視聴覚教材のテーマ	構成と内容	時間
保育カンファレンス①アセスメント(情報収集と整理)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保育士からの相談を受け、障害児保育リーダーが発信した保育カンファレンスの実施</li> <li>・ 保育士間で情報収集とエピソードの整理</li> </ul>	11分
保育カンファレンス②計画(実態把握に基づく計画の作成)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもの姿の抽出</li> <li>・ 個別の指導計画の作成</li> </ul>	6分
保育カンファレンス③保育実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 計画に沿った実践を実施</li> <li>・ 実践での様子や前後の状況を記録に記入</li> </ul>	6分
保育カンファレンス③評価(実践課程の振り返り)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実践過程の振り返り</li> <li>・ 方向目標の確認、当初の計画からのズレを修正</li> </ul>	
保育カンファレンス④改善(計画の改善と発展)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 当初の目標を評価</li> <li>・ 今後の保育方針の確認、と個別支援計画の重要性、子どもの成長を評価</li> </ul>	9分

## (1) 保育ニーズをアセスメント(情報収集と整理)

金・園山（前掲）の示した「各幼児に的確な発達課題及び目標や支援案を引き出す作業」に関して、講義では個別の指導計画の作成の手順を分かりやすく伝えるために、身近な「オーダーメイドの洋服の仕立て」で例示して解説した。

障害のある子どもは一人ひとり状態や個性が多様であり、その一人ひとりの違いや特性を認め、個々のニーズに対応していくためには年齢ごとの一律なクラス計画ではサイズや素材等が合わず、生活のしづらさを生じやすい。障害のある子どもの個別の指導計画 PDCA サイクルにアセスメントの“A”を加え、子どもを観察し、個別の指導計画の作成を“採寸・パターン製作”とし、保育実践を“試着・着用”と表し、評価や改善の際に成長や発達があり、計画の再作成を“サイズの微調整”“サイズ変更”といった馴染みのある言葉で置き換えた。洋服の仕立てで例示すると、計画を立てる際、子どものサイズ（子どもの問題点だけでなく、強みや得意なことを含んだ子どもの全体像）を見誤ると別のサイズの洋服が出来上がり、対象の子どもに合わないものになってしまう。また、作成した際にはサイズが合っている、成長とともにサイズが変われば、子どもに合わせて洋服を調整していく必要がある。それにより、子どもは着心地がよく、自分の身体に合ったオーダーメイドの洋服を着用することができ、ひいては生活の質の向上につながっていくと考える。個別の指導計画のA・PDCA（図3）を行うことは、子どもの最善の利益につながる保育を行うことと同じだといえる。

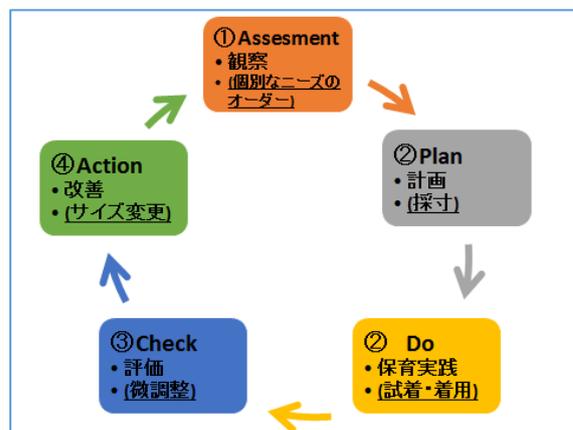


図3 「オーダーメイド」のA・PDCAサイクル

計画の作成前には、洋服でも最初の採寸が重要であるように、保育の中では観察によるアセスメントの重要性を教示した。その後、視聴覚教材の保育カンファレンス動画 ①(写真 1)を視聴した。

今回研修では、視聴覚教材の中で保育士等が発言した子どもの内容について、気になった箇所は、メモを取るなどして演習の際の参考となるように助言した。

### (2) 計画(実態把握に基づく実践計画)の立て方

子どもの行動分析の概念図(図4)を示し、今回取り上げた事例を用いて、具体的に子どもの行動の読み解き方と目標設定までのプロセスを示した。行動の事前の状況や背景と、行動によって得られる事後の状況や結果から、子どもの行動のもつ意味や子どもの思いや願いを読み解くための考え方を示すことで、保育士等は子ども自身が困っているから気がかりな行動をとってしまうことが理解できるだろう。そのうえで、子どもの気になる様子や日々の行動を記録するエピソード記録シート(表2)を提示し、視聴覚教材の中で保育士等が発言した内容を書き入れ、演習した。各園ではなるべく多くの保育士等で記録を一定期間書き続け、その記録を共有し、保育士等の対話を通して子どもの思いや願いを理解して、目標を設定し、支援につないでいくことの重要性を確認した。この流れを丁寧に教示することで、金・園山(前掲)<sup>9)</sup>の示した「各幼児に的確な発達課題及び目標や支援案を引き出す作業」が可能となることが期待される。

表2 エピソード記録シート

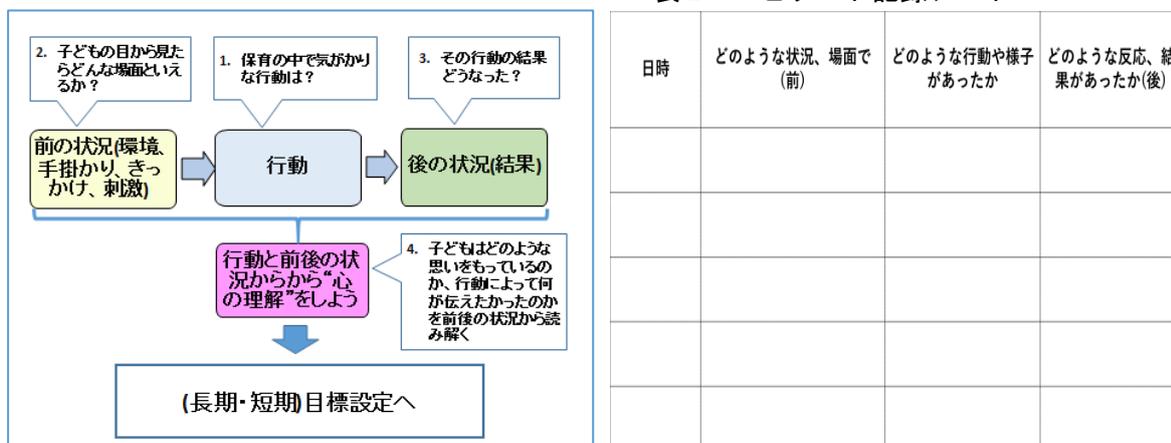


図4 子どもの行動分析の概念図<sup>注4)</sup>

日時	どのような状況、場面で(前)	どのような行動や様子があったか	どのような反応、結果があったか(後)

### (3) 実践・評価(実践過程の振り返り)

個別の指導計画の様式(図1,5)を用いて研修を行った。まず、子どもの姿をアセスメントしたうえで、年間の育ちを見通した年間目標を立て、具体的な保育を踏まえた月間もしくは期別の短期目標を立て、具体的な援助を記入する。そして、Do 実践記録の欄には目標達成に向けて保育士等が援助したことや子どもの様子を記入する。子どもの目標に関して、問題行動や気になる姿だけでなく、よい姿や成長が見られる点などプラス面も記入する。ただし、個人の主観に基づいた記述は避け、誰が見ても分かるように事実を書くことを確認した。Check 考察の欄には、どのような援助はうまくいったのか、うまくできた場合には何がよかったのか、またうまくできなかった場合にはそ

の理由を考え、どのようにすればよかったのか振り返り、改善策等を記入する。他にできそうな遊び場面や援助、環境構成等、次に向けた仮説を記入する。子どもの姿から思いを読み解き、次につながる視点も記入することを確認した。

保育カンファレンス②の視聴覚教材を見た後、子どもの姿をアセスメントし、図5の①～③を実際に記入して演習した。

図5は「成長の願いと保育実践（個別の指導計画と記録）」のフォーマットを示しています。フォーマットは以下の通りです。

Plan 成長の願いと保育実践（個別の指導計画と記録）  
 ○○ ○○の[ ]月

子どもの姿	短期目標	具体的な援助(配慮事項)
		③目標に合わせた具体的な保育士等の援助を記入。
DO 実践記録	Check 考察	
④子どもの目標に関して、問題行動や気になる姿だけでなく、よい姿や成長が見られる点などのプラス面も記入する。個人の主観に基づいた記述は避け、誰が見ても分かるように事実を書く。	⑤どのような援助はうまくできたのか、うまくできなかった場合には理由や改善策を考え、どのようにすればよかったのか等、次に向けた仮説を記入する。子どもの姿から思いを読み解き、次につながる視点も記入する。	
Action 実践計画の改善と発展		
⑥月末もしくは学期末に振り返り、軌道修正を行い次月・期へ引き継ぐ。		

図5 成長の願いと保育実践（個別の指導計画と記録）<sup>注5)</sup>

（4）改善(実践計画の改善と発展)

Action 実践計画の改善と発展の欄には、図5の⑤のCheck 考察の積み重ねを受けて、月末もしくは学期末に振り返り、軌道修正を行い次月・期へ引き継いでいく。複数の保育士等が様々な場面から観察・記録し、その実践記録を共有し、話し合い、それを踏まえて次期に向け、必要に応じて軌道修正をして改善、発展させていくことが大切である。子どもの行動はそのときの状態や時間、場所などの様々な要因によって違う側面を見せることがある。視聴覚教材④では、保育士同士が子どもの姿を記録により振り返り、保育の成果や課題、現在の子どもの姿と次の目標(未来の子どもの姿)は適切かを対話の中で確認し合っている。保育カンファレンスの中で、障害児リーダーが核となり、子どもの思いと保育士等の願い、次の方向目標を引き継いでいこうとする場面も受講保育士等は視聴した。その後、図5の⑥と図3の「1年間の評価」欄を実際に記入して演習した。連絡、連携を丁寧に行うことがきめの細かい保育の連続性・一貫性につながっていくこともスーパーバイズの中で教示した。

以上の教授方法・内容を検討し、研修を通して実践したことの有効性を確かめるため、研修を受講した保育士等にアンケート調査を実施した。

## 2 アンケート調査

### (1) 調査対象と調査方法

本調査は201X年X月、A県内の保育士等キャリアアップ研修「障害児保育」を受講した保育士等にアンケート調査を依頼し、研修後に実施した。回答者/配布 157/160名(回収率98%)

### (2) 調査項目

調査項目は所属の施設種別、勤続年数、設問は5項目であった。項目は以下の通りである。

- Q1. 研修の中で、視覚教材の必要性や位置づけは明確であったか。  
 Q2. 研修の教授内容を補うための視聴覚教材の内容は分かりやすかったか。  
 Q3. 研修の中で、視聴覚教材の分量は適切であったか。  
 Q4. 研修では視聴覚教材を使用したか、ない場合に比べて理解度は進んだか。  
 Q5. 「障害児保育」に関して、今後どのような視聴覚教材があったらよいか。(自由記述)

Q1～4は選択式5件法、Q5は自由記述で行った。

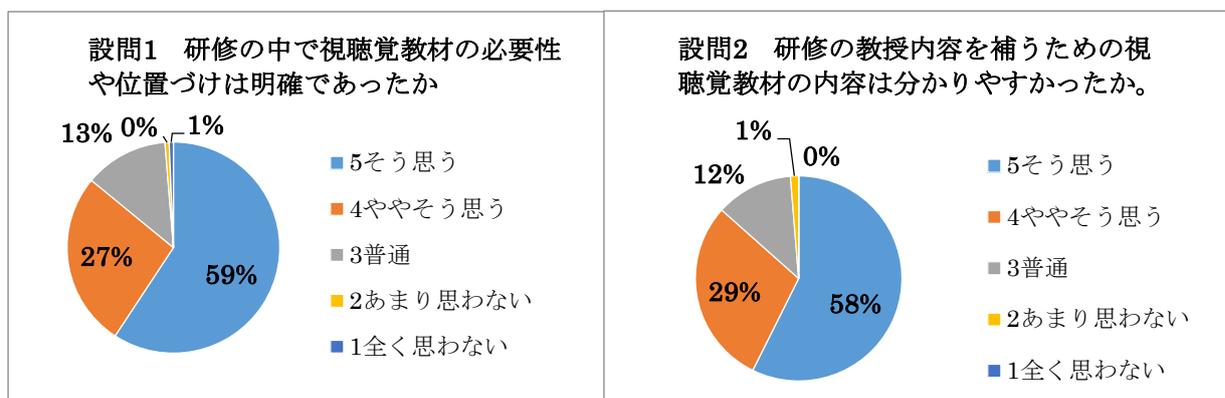
### (3) 倫理的配慮

本研究にかかるアンケートについては、無記名で行い、研究への同意を得たうえで統計的に分析を行った。

## IV 結果

アンケート調査の結果から、おおむね研修の内容や量(時間)については、成果があったといえる。しかし、本研究は、視聴覚教材を用いることで誰でもが教授できる研修の在り方のマニュアルを示すものではなく、「個別の指導計画の作成、記録及び評価」が可視化できる補助教材として講義と演習を補う意味合いをもつものである。

また、保育士等キャリアアップ研修でのアンケートであるため、回答者の属性として保育所保育士、保育教諭であり、幼稚園教諭からの回答はないため、幼稚園での個別の指導計画の作成については本研究で明らかにすることはできない。



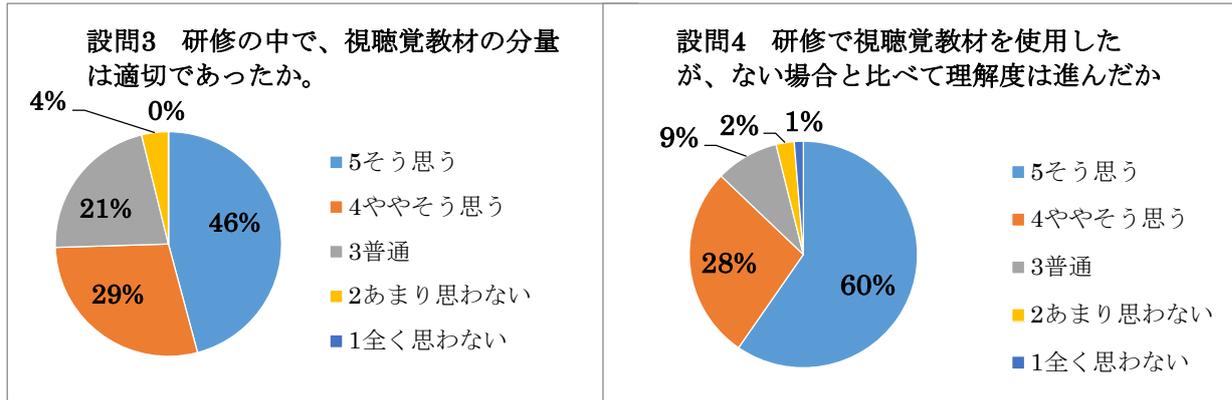


図6 アンケート結果

## V 考察

本研究で行った「個別の指導計画の作成、記録及び評価」の教授方法・内容は、保育士等が個別の指導計画を作成するうえで抱く困難課題を軽減することに役立ったかの機会について検証していく。

1 研修内容を教授するために、方法を組み合わせ、作成の段階ごとに繰り返したことは、保育士等の困難感を軽減し、学びの補強に役立ったか。

(1) 本研究では、保育現場での使いやすさを考慮し筆者らが作成した個別の指導計画の様式を用い、講義と視聴覚教材、演習、スーパーバイズの組み合わせを1クールとした。また先行研究から明らかにされた「発達課題や目標」「支援案」「具体的な指導内容」「評価」といった各段階の困難感にアプローチするために、個別の指導計画作成過程を大きく4段階に分け、4クールでの教授を試みた

アンケートの設問1は、視聴覚教材の位置づけについての適切さを問う設問であったが、明確だと回答した割合は86%（と思う59%、ややと思う27%）であった。

また、設問2では、研修の教授内容を補うための視聴覚教材の内容について分かりやすいと回答した割合は87%（適切が58%、ややと思う29%）であり、受講者の理解につながったことがうかがえた。

受講者は講義の後、保育カンファレンスの出席者になったつもりで視聴覚教材を見て、そこでの情報をもとに実際にシートに書き入れて演習を行い、演習後にはスーパーバイズを受けたことで、振り返りの機会が保障され、学びの補強につながったのではないかと考える。

保育カンファレンスの視聴と個別の指導計画の作成を4クール繰り返したことで、保育カンファレンスが保育士等による対話へと発展し、計画の作成と連動することの必要性にも気づくよう配慮した。

(2) 講義-視聴覚教材-演習-スーパーバイズを組み合わせた筆者らのもう一つの意図としては、90分間という研修において、聴く、見る、書く、話す、考える、深める、整理するといった様々な学び方の要素を取り入れることで、主体的に多角的な視点から考えることで、深い学びにつながるねらいがあった。保育士等が自らの保育実践と照らし合わせ、現場に戻ったときに個別の指

導計画の作成の実践力を身に付け、自園での作成の浸透に役立てることができれば幸いである。

一方で、設問3では視聴覚教材の分量について適切だと回答した割合が75%（そう思う46%、ややそう思う29%）であり、他の設問に比べ、適切と回答する割合が少なかった。視聴覚教材を導入したことにより、演習時間が減少したことは否めない。全体の研修時間や時間配分については今後検討の余地が十分にある。

2 視聴覚教材の使用は保育士等の教授内容の理解に役立ち、今後、自園での個別の指導計画作成を行う一助となったか。

アンケート調査項目の設問1では、研修の中で視聴覚教材が必要だと回答した割合は86%（そう思う59%、ややそう思う27%）、設問4では視聴覚教材を使用する場合としない場合とを比べ、使用することで理解度が進んだと回答した割合が88%（そう思う60%、ややそう思う28%）であった。それ以外の選択肢を選んだ回答の中には、「個別の指導計画の研修を受けたこと自体、今回が初めて」や「視聴覚教材を使った研修を今まで経験したことがない」といった理由から比較できないと書き添えるものもあった。

本研究で使用した視聴覚教材によって、障害のある子どもの保育を園の職員が共に考えていこうとする保育カンファレンスの雰囲気、例えば担任保育士や周りの保育士の態度や所作、情報交換をする際の言葉の応答的なやり取り、ファシリテートする障害児保育リーダーの進行の様子等、言葉による説明だけでは伝えづらいことも理解する一助となったのではないか。保育カンファレンスで保育士等が互いに障害のある子どもの保育について知恵を出し合い、個別の指導計画を作成し、園全体が一丸となり一貫した方針で集団保育のなかで実現できるようになることを願いたい。

設問5で、「障害児保育」に関して他に必要とする視聴覚教材について自由記述を求めたところ、「障害のある子どもの保護者への対応」や「関係機関との連携」に関する回答が非常に多く、理由として「視聴覚教材があるとイメージがしやすく、保育現場で取り入れやすいから」と記されているものもあった。このことから、学生時代に保育実習等では経験する機会がなく、保育現場で働いてからも他園の取組をモデルにすることが少ない題材に関する視聴覚教材が求められていることが分かった。

3 保育士等が個別の指導計画の必要性を実感し自ら作成できると思える教授内容であったか。

原野ら(前掲)は「個別の指導計画が幼稚園の保育になじみ、その意義が理解されるようになれば、個々の子どもの実態を理解し、保育をすすめる上での手がかりとなり、時間をとられるという負担感の軽減にもなるのではないか」<sup>10)</sup>と述べている。本研修では、前述の「目標や支援案の立案への引き出し作業」が円滑に行えるために、子どもが行動を起こす事前の状況や背景と、行動によって得られる事後の結果から子どもの思い(願い)を読み解く考え方(図4)を教示し、その子どもの思い(願い)から目標や支援案を立案する流れについて、今回用いた事例で具体的に説明した。同時に、エピソード記録シート(表2)を記入する際、何気ない子どもの様子や小さな変化に目を向け、観察項目に沿って記録を積み重ねることで、障害のある子どもの保育の観察眼や子どものとらえ方を磨き、障害のある子どもの保育の現状を分析する力を育てることにつながっていくのだと考える。自園で実践を継続していくために、記録シートは園内の職員がいつでも記入できる場所にあり、

時間がかからず気軽に記入できることなど、継続していくポイントなどを確認した。観察・記録の継続により、子どもの思いが見え、保育の現状を分析する力が獲得できたと実感できたならば、労力や時間をとられるという負担感は軽減することだろう。「具体的な指導内容」「評価」については、V考察 1 (1) (2) において前述した通り、視聴覚教材を見た後、保育カンファレンスの事例をシートに記入する演習を行った。その後、受講者自身の保育経験から、実際に指導内容や評価を考える時間を設けた。このクールについては、さらに保育士等の情報交換を多く取り入れるために、演習時間の確保が必要であると考えた。

酒井・田中(2013)は、「保育士等には障がい観による視点以上に、保育専門家としての知識(保育学)と、子どもを見る目(子ども観)、保育観を下敷きにした保育士等従来の視点を文章化すること」<sup>11)</sup>が大切な視点であると示している。筆者らも、障害のある子どもの保育の計画の手がかりは日常の保育の中にあり、日々の保育の中で子どもの一番身近にいて、子どもの実態やニーズ、多様な育ちや家庭環境等を考慮したオーダーメイドの個別の指導計画を作成できるのは保育の専門職である保育士等をおいていないと考える。本研究では、障害のある子どもの個別の指導計画作成の一連の流れを洋服のオーダーメイドによる仕立てで例えたことで、よりなじみやすく、保育士等自らがこれまでの保育で培ってきた自分たちの知識と技術をもとに作成できることを実感し、自園での実践につなげていくことを期待する。

## 今後の展望

研修を受講した保育士等からは、障害児保育リーダーとして障害のある子どもの個別の指導計画の作成を推進していくに当たって、研修で使用した保育カンファレンスの視聴覚教材と障害児保育リーダーの台詞を含んだ進行の手引き、個別の指導計画シートに対する要望がいくつか聞かれた。また、今回は小規模園設定の保育カンファレンスの視聴覚教材を用いて研修したが、大規模園の場合や、園内での情報交換が消極的な場合の障害児保育リーダーの働きかけ方に対しても知りたいという要望も聞かれ、この分野に関するニーズの高さがうかがえた。しかし、障害児リーダーは単に示されたセオリーに沿って進めればよいというものではなく、合理的な配慮を踏まえたうえで、一人ひとりの最善の利益を考慮した個別性に十分配慮し、その都度、園の状況や様々な環境に合わせながら進めていかなければならない。また、園全体で障害のある子どもを見ることで、担任保育士一人では発想し得なかったアイデアが得られ、保育の可能性を広げることができる。全職員が子どもに対する共通理解を行なうことにより、子どもはクラス内はもちろん、クラスの枠を超えても一貫したかわりが得られるであろう。今後ますます、園では個と集団のバランスを見ながら、障害の有無に関わらず、みんなと一緒に生活するインクルーシブな保育の中で、それぞれの育ち合いを念頭におき、個別の指導計画を作成していく視点が大切になってくる。保育士等がこの研修後に、保育現場でどのように生かされているのかを検証する必要がある。

小栗(2017)は、「特別支援教育が始まって10年が経つにも関わらず、個別の指導計画作成が幼稚園において浸透しないのは、現場の保育者にとってその作成方法や支援案の立案方法がわからないからであり、言い換えれば保育者養成校での教育の不十分さも原因の一つである」<sup>12)</sup>と述べている。筆者らはこの点について着目し、保育士等養成校の学生を対象にした、障害のある幼児における「個別指導計画の作成と評価」の教授法について検討中であり、教授後のアンケートデータを現在分析し本研究を継続し展開している。

注

- 注 1) オーダーメイドという考えは、保育の世界では「オーダーメイドデザイン」として保育計画の意で指導案等にすでに用いられているが<sup>1)</sup>、本研究では障害のある子どもに特化し、個別の指導計画に対して用いるとする。
- 注 2) アローウィン DVD カタログ (2019 年度版)、新宿スタジオ総合カタログ (2018)、株式会社映学社作品一覧 <http://www.eigakusya.co.jp/>、株式会社オプチカル教育映像ソフト一覧 [www.optical.jp/dvd/welfare.php](http://www.optical.jp/dvd/welfare.php) (2019. 3. 17 情報取得) を参照した。
- 注 3) 尾崎康子、小林真、水内豊和、阿部美穂子、(2018)、よくわかる障害児保育第 2 版、ミネルヴァ書房 p154 の「図IX-2 個別の保育計画書式 (例)」を参照し、筆者らで作成した。
- 注 4) 平成 22 年度ハートフル保育専門アドバイザー派遣モデル事業「気になる子どものための保育アドバイスブック」(2018) 富山県臨床心理士会の「子どもの行動の分析&支援シート」を参照し、応用行動分析の考え方をもとに、筆者らで作成した。
- 注 5) 尾崎康子、小林真、水内豊和、阿部美穂子、(2018)、よくわかる障害児保育第 2 版、ミネルヴァ書房 p155 の「図IX-2 個別の保育計画書式 (例)」を参照し、筆者らで作成した。

引用文献

- 1) 戸田雅美、(2004)、保育をデザインする 保育における「計画」を考える、フレーベル館、p p. 23-26
- 2) 文部科学省、(2008)、幼稚園教育要領第 3 章指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項 第 1 指導計画の作成に当たっての留意事項 2 特に留意する事項 (2)、小学校学習指導要領第 1 章総則 第 4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項 (7)、中学校学習指導要領第 1 章総則 第 4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項 (8)
- 3) 内閣府、(2003)、「障害者基本計画」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/021/015.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/021/015.htm)、2019. 2. 1 情報取得
- 4) 文部科学省、(2018)、「平成 29 年度 特別支援教育体制整備状況調査結果」、  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/\\_icsFiles/afieldfile/2018/06/25/1402845\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/_icsFiles/afieldfile/2018/06/25/1402845_02.pdf)、2019. 2. 1 情報取得
- 5) 吉川和幸、(2016)、幼稚園における障害児の「個別の指導計画」に関する一考察、北海道大学大学院教育学研究院紀要第 127 号、p28
- 6) 前掲(5)、p27
- 7) 金珍熙、園山繁樹、(2008)、公立幼稚園における個別の指導計画に関する実態調査-「障害のある幼児の受け入れや指導に関する調査研究」指定地域の協力園への質問紙調査-、障害科学研究、32、p142
- 8) 菊田真代、宮木秀雄、木船憲幸、(2014)、幼稚園教師が抱く個別の指導計画の作成に関する困難感、特別支援教育実践センター研究紀要第 12 号、p 60
- 9) 原野明子、朴香花、佐藤拓、鶴巻正子、(2009)、福島県内の幼稚園における個別の指導計画の現状、福島大学総合教育研究センター紀要第 7 号、p97
- 10) 前掲(4)、p3

- 11) 前掲(4)、p3
- 12) 前掲(7)
- 13) 前掲(7)
- 14) 前掲(9)
- 15) 酒井幸子、田中康雄、(2013)、発達障害が気になる子の個別の指導計画、Gakken、p14
- 16) 小栗貴弘、(2017)、「個別の指導計画」を用いた発達障害のある幼児の理解と支援-支援案と支援ツールの作成-、作新学院大学女子短期大学部研究紀要第1号、p62

#### 参考文献

- ・松尾寛子、三好伸子、(2015)、保育士養成施設における障害児保育科目教授方法の比較検討、神戸常盤大学紀要第8号、pp 9-15
- ・松尾寛子、(2009)、保育士養成校における学生の学習に対する意識調査—演習「障害児保育」の授業への取り組みを中心に—、関西国際大学研究紀要第10号、pp 209-216
- ・尾崎康子、小林真、水内豊和、阿部美穂子、(2018)、よくわかる障害児保育第2版、ミネルヴァ書房